里見八犬傳

九輯　四十八

特
イ.曽 4
600
286

賜

南總里見八犬傳第九輯卷之四十八

東都　曲亭主人編次

第百七十九回　照文歸東して房總福多し　東西和睦して兩國津を開く

仁人仁を欲すれバ仁こゝに至る。仁外にあらず。仁必其人に在。義外にあらず。義必其人に在。求ると求ざるのミ。里見安房守義成主博愛仁恕の心もて。水陸の施餓鬼果しかバ。大法師を首にて来會の大衆數百口。次の日稲村の城へ召登されて。義成隨即對面あり。齋を賜り布施を牽る。其賞待浅からず。各身の暇を賜りて咸其寺にぞ返されける。是より先犬江親兵衛も暇あることゆゑて。瀧田の城に參りまつり。姥雪代四郎と共侶に義實老侯に見參して君恩の辱きを拜しまつるども。當下義實主も親兵衛が京師なる奇事。且今番の戰功の事の顛末。又代四郎が三河なる。苛子崎の賊難と京師

文庫

特 イ 600 286

賜

にても親兵衛の帮助に做りしなりとて。猶詳に饗させて。甲乙となく听の人に。先茶を賜り果子を賜り。且饌をしも賜りて。終日にしてはまだ飽ねば。其次の日も。次の日も。只這老少両個をのみ召せて長き春の日の詞敵にぞなしたり。然バ又直塚紀二六を蜑崎の家にかへして。則主人の女房に京師にてありし事の箇様々々と報るのみ。曩に照文ハ犬江親兵衛を迎執ん為に二たび使を命せられて京師へ赴く。水路にて類の怪異ありしかバ。往日苫屋八郎景能の注進にて。其大槩を知られしのみ。後の安危を知よしもなく。今に至て信なけれバ。いかにぞと思ふのみ胸安からねバ。紀二六も倶に額を病めて。慰め難つ過せ日の春いとづらに暮んとまた花落て若葉做をそ朝倉山近く見る序に懐目ハいまで遥なる。憂苦をやるかたなかりけり。恁りし程に。當春三月廾八日に蜑崎十一郎照文が恙もなく京師より。歸帆の告ありしかバ。義成主ハ歓びて。両家老辰相清澄并に犬塚信乃犬江親兵衛犬川荘介犬飼現八犬田小文吾政木大全杉倉直元等をも召聚へて専他を俟るに程に。其日照文ハ刀筆吏大岸法六郎と倶に。郷兵伴當夫役们を領てかへり来ぬる。其船洲崎の港口に果しハ。今朝巳牌の時候なるべし。是より路次をいそぎて。約莫二三時程に夙く稲村の城に参りしかバ。義成則衆議廳にて對面あり。法六郎も召よせられて。照文と倶に見参を両家老五犬士を侍坐して其言を听せらる。當下犬江親兵衛を君命によりて我と出て照文に向ひていふやう。蜑崎生近曽我歸東の義ハ後にこそ聞ゆべけれ。又曩に遠江灘にて和殿の船に類怪の遇れけるよしハ。故ありて既に聞し召ぬ。其義を則箇様々々と田税戸賀九郎と苫屋八郎等が主僕十餘名新井の浦に漂着して奇功ありし事の趣の其大畧を解示して。和殿ハ亦何等の故に京師に久しく淹留ゑする。歸帆の遅かりしハ甚麼ぞやと問へバ照文然ハ逸時景能のみならず臣等も故ありて得知りぬ。其義ハ後に稟上ん。既に知し召れたる那類怪の厄解けし時臣等が船を西を投て走るを一日一夜津の海近くなる程に。勍風猛可に吹起りて檣を折り楫を摧れ船覆らんと

志ぬる者幾番といふ事を知ねバ人我生る心地なく。波と風とに儘して漂ふ事又一日一夜。風波やうやく歇りて我船ハ神風の伊勢の阿曹に寓りけり。その地ハ則伊勢の國司北畠殿の封内にて陣題網曳平太夫周魚と喚做す者の沙汰として半死半生なる我們主僕を浦の守屋に扶容させて醫師并に漁夫等に課せて看病等閑なく一個一個に湯掖を護めて勦り叮嚀なりけれバ我身夫役に至るまで死ざることを得されども。船にハ金子と方物の最多くあるを訝りて周魚悄地に思ふやう。他等ハ嚮に相告て安房の里見の使臣なりといひしハ必詭言にて實ハ海賊なるべしとて敢て一人も漏すことなく緊しく牢舎に繋措せて来由を國司に訟けり。然バ是等の穿鑿に去歳ハ果敢なく暮んとを有信し程に扇谷山内の両管領諸候を連絡兵を合せて館を攻伐つるの風聲那地へも聞えしかバ臣等ハいよいよ胸安からねバ。いかで身を免れて徑に還りて御先途に逢ばやと思ふのミ。計の出る所を知ねバ只沼館の御印章ある。修善寺紙を舎出して。網曳周魚に示しつゝ。里見の使臣なる照据に做せども。北畠家と一たびも書札の往来なき故に周魚ハ其をしも信とせず。放ち還すべくもあらざりし。其頃北畠殿ハ東闘戰孰まさる敗軍の艦海を渡して這地に來ぬるもあらんと欲て海邊の戍りを固くせられ且間諜児を武蔵と安房へ遣して両敵の勝敗を備に知まく欲し給ひ今茲正月下浣件の間諜児毎ちゞ多氣の城にかへり来る両管領敗軍のその趣ハさらにて犬阪犬村犬山ハ北るを逐て武蔵へ渡して五十子新井大塚忍岡の四箇城を輙く捕たる事の顛末又行徳國府臺の闘戰に我御曹司を首めて犬川犬田犬塚犬飼の武勇智計をもて敵将多く虜にせられし。山内顕定主と扇谷朝良主千葉長尾等敗北まで具に注進ありといふ事の便宜ハ是のミなれバ臣等が去歳の初冬に京師へ使を命せられて船路を西へ赴たる其秘事さへ間諜児が揣り知る據ありけん。都北畠殿へ告稟しといふのゝ後に知られけり。是によりて始より臣等が言の

偽詐ならぬ歟。はやくに悟られけん。周魚に見せる御印章をよく認る者ありしかば。いよ〳〵那里の疑ひ解けて。北畠殿下知すらく。里見は原是南朝の忠臣にて我先祖と同義烈の好あり。今は山海千里に分据すれども其家臣なる者の渡海幸なく破船して我封内阿漕の浦に寓りしを反て疑ふて禁獄久しくなるまでに留め措しは無慙なれ。夙く異船もて其故方へ送り遣すべき者ぞとありしかば。綱曳平大夫周魚奉りて。臣等主僕を牢舍より扶け出しつ。勅りて國司の御使々々と事の情由さへ解訟示しつ。則巨船一艘に所持の金銀方物まで一箇も遺さず返し載て。且舵工篙師十餘名を假し加へて。船出を風に儘されし深切初に同じからねば。臣等が歡びいふべうもあらず。且肚裏に思ふやう。我君天の資によりて水陸の大敵咸敗績して。房總無異の聞えあるに。今さら這里より船を返して。安房へいなんは要なき所行なり。然ばとて大江が既にかへり参りて。國府臺の開戰に奇功あり

といふ。さも亦多氣の兩諜見が國司へ注進せしとも知らぬ。然らば京師へ赴くとも。是も要なき事なるべし。といふにせましと。分よしもなく。左さま右さま尋思をしぬれば。究竟の一義なれども。其の折をもて京師に上りて。兩管領の暴傲を大兵をもて我君を伐滅さまく欲せる闘戰の顛末を室町殿に告奉り。天朝に奏聞を經て。調貢の金子と土宜を公武二庭に献らば。我君忠恕孝順なる年來の御仁心。その時にも顯れて室町殿にも朝廷にも其私なき誠心を知るべく。後々まで首尾よからまじやと思ひぬれて。法六郎に係々と意裏を示しつ。國司の恩義を綱曳周魚に謝し。且別を告て我主僕數十名一人も恙あるものなく。那巨船にうち乘て纜を解く旦開の順風に西を投てぞ走らせる。恁而二月の初旬に至りて。船浪花津に果しかば。隨即那津に旅宿を投めて。阿漕の船子。舵工篙師等も倶にかへし遣しつ。却我伴當の心利るを兩三名悄地に京師に遣して事の便宜を揣らするに。

當春京師の管領政元主ハ故ありて罷られぬれバ畠山政長主一個管領たりと見えぬるも亦幸あるに似たり。因て大岸法六に機密を示し心得させて那御印章ある紙を用ひて室町殿へ進らせらるゝ呈書一通と奏啓の上書をさへ形の如くに書寫させて調貢の黄金土宜を目録に合せ配當して長櫃幾箇かに藏め是を夫役に舁せ京師に上りて去歳の秋相識れる客舍を宿とせつ次の日大岸法六と倶に朝服を整へて伴當夫役を從へつゝ室町殿へ参上るに法六郎を副使として田税苫屋の両人も那類怪の故をもて遠江灘にて相別れし御使に人足らねど儀て臣等と法六郎等ハ管領政長主に就て先館の御書を進らせて。且稟もらく寡君義成年来仁政を布施して民を撫め國を治めて敢隣國を犯さず常に上を敬ひて調貢の礼を懈ることあらざるに關東の両管領定正顯定其政へ公ならず。叨に私怨をもて諸侯を連ね兵を合せて義成を伐まくも。義成素より罪なくて。罪を連師になゝて脱る路なく。房總褊小の士卒をもて三路の大敵を防戰しより只一日にして勝ことを得て水に數千の戰艦を燒淪め。陸には數万の大敵を撃走せたり。是併蔽藩の八犬士犬阪犬塚犬村犬江犬山犬飼犬川犬田なンど嗚傚る者の智計武勇によりてこそ大敵既に迹を埋めて水陸の路闢けしかバ使臣蜑崎十一郎照文大岸法六郎澄妙等をもて随即徴功を訴まつりて黄白方物を貢進を願ふハ夙く御制度ありて両管領の暴を禁めあらし東國の大小名和平して國民塗炭を免れなバ。獨義成の歡びのみならず。八箇國の良賤男女咸柳営の御武德を仰まつりて家舞戸謡置酒して太平を樂むべし。是の義を以て穩便なる御下知をこそ願しけれ是則義成が呈書に載する所陪臣照文等が意見をもて稟もふするぞかし。宜く御亮査あらまく不しうはなれとおそるく愁訴して則室町殿（足利義尚）へ一千金東山殿（義政）へ一千金管領

政長及當時の權家伊勢氏を首にして黄白の贈ものあり。土宜方物も形の如く。數を盡して使札の礼ともに政長則其義を容て且いはく。東國兵亂の事実も上にも旣に聞食て驚れ思召も所之。房州義成の愁訴実に是其理あり。剰又貢進の礼屢にて忠誠を表せらる。今さら何等の疑ひあらん。その義を備にせえ上て褒貶は上意に依らん旅亭に退りて御沙汰を等ねと云て照文等を返しけり。却照文等は逗留の間ひ摂録へも廻勤して朝廷へ貢を献る搢紳家へ人情も先例によりて漏れなるし。亦程に室町殿は那訴を聞食て管領并に評定衆を召聚へて詮議あり。里見義成は是謹慎の君子にして。貢進の礼両三番に及べり。是によりて之を親れば今愁訴する所情願忠義を知るに足り。されど由子路ならぬ者の。片言をもて孰かよく訟を定むべき。夙く間諜児を武蔵と安房へ遣して那両敵の善悪邪正を捞らせあふべくもやとて衆議一決せらしかば義尚則政長に

課するよしあり。政長是を承りて退りて軈て間諜児を東へとぞ遣しける。偖而言月の初旬に至りて那間諜児等かへり来て。定正顕定両管領の非義を告る事具にして且我館の御仁心并に八犬士諸勇士の才幹武畧戰功大義の一伍一十をのこるか隨に稟上しとりぞ。その義も後に洩さゞりき。然ば室町殿には重て詮議を遂られて褒貶賞罰の制度ありけん照文等を管領邸へ召よせて政長則上意を傳るやう。這回房州の愁訴既に其実をあらわす。これをもて御使を東國へ遣されて定正顕定を御譴責ありて房州と和睦仕るべき旨を御下知あるべし。汝等は御使の郷導せ仕りて倶に東へ退りねとて御教書を逓與されける。事の便宜は是のみならず。掛向は最も畏き天朝にも我館の御忠信と八犬士の大功を感思召よしありて勅使遣さるべしと傳えけり。是によりて秋篠将曹廣當を勅使代に做されて室町殿の御使熊谷二郎左衛門尉直親と共侶に安房へ参向すべしとぞ。尒程に件の

両御使秋篠廣當。熊谷直親ハ。伴當を夛く領て。三月十二日ニ啓行して。岐岨路より先上毛ニ造らまくも。這時山内顕定ハ。上毛沼田の城ニ在り。又長尾景春ハ同國白井の城ニ在り。又扇谷定正ハ武藏なる入間の河鯉ニ在城をとり。其聞え紛れなけれバ。那三將ニ上意を示して其罪を譴め以後を儆め。兼服和平ニ至るの日両御使ハ其家臣等を將て。水路を安房へうち渡して上意を傳ふべしと定めらる。是ニよりて照文等ハ上毛より両御使ニ相別れて。那敵城へハ立よらで登時熊谷直親ハ照文ニ示していふやう。汝ハ夙く安房へ退りて。その義を房州へ傳へ屆く。又武藏相摸なる。新井五十子忍岡の城ニありと聞える三犬士ニも宣示して。退城の准備を做さしむべし。とある中途よりその指揮ニ儘せて。臣等ハ法六郎と倶ニ伴當夫役を従へて。昨日五十子の城ニ來つ。件の首尾を犬阪毛野等ニ告しかゞ。毛野等が歎びいふべうもあらず。軈て忍岡と新井の城へ使をもて道節大

即高宗と

角ニ傳達す。その他大塚石濱の城なる。登桐三八郎良于小森但一郎高宗と穂北なる。落鮎餘之七有種ニハ別ニ使をもて必通達すべしといふ。毛野又照文ニ談ずらく。室町殿の御威徳もて両管領兼服せバ。那御使秋篠熊谷ハ必當境來着して。水路を安房へ渡さるべし。其折我亂智ハ両御使の案内ニ立て稲村の城ニめぐり參りてん。和殿ハ夙く歸城して。その義を館へ告まつりね。その余の事悠々と後の進退を解示して。酒飯を羞めなどする程ニ日ハ暮て順風なりけれバ。柴浦ニ維せる船ニ臣等主僕を載て。波の上安らかニ通宵走る風のまに〳〵。洲崎へ歸着仕りぬと言詳ニ告稟すれバ。義成主を首ニて親兵衛自餘の四犬士三家老憶ぎも皆うち笑れて。奇也々々と稱贊も其が中ニ義成主ハ時ニ怡悦ニ堪ざるなりけん。照文を身邊近く找ませて宣ふやう。料らざりける汝の擇記是第一の奇功。八犬士ニ伯仲すといふとも過たりとするべからず。現ニ禍福ハ糾へる纆の

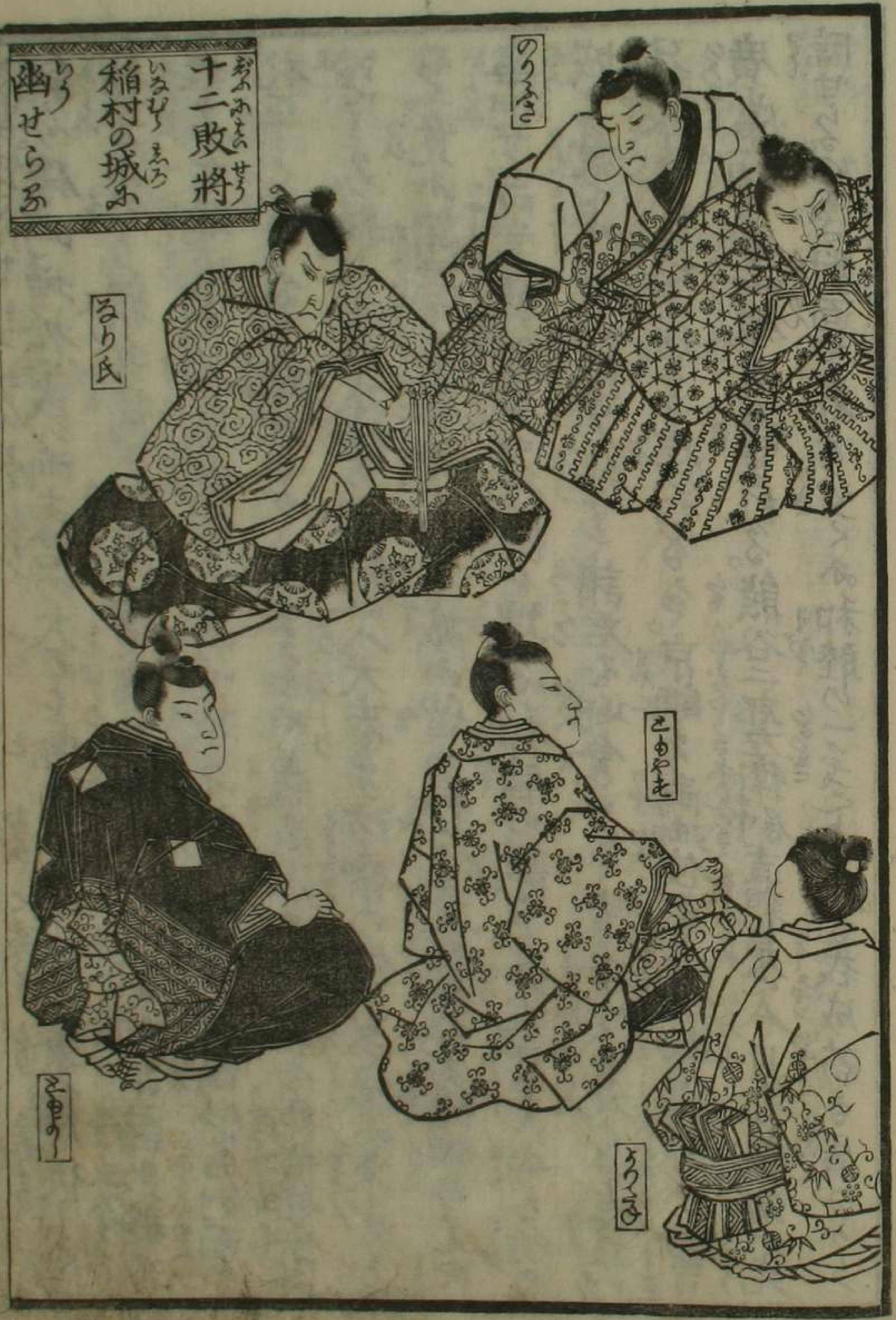
如し。約莫倚伏の至る所、事塞翁が馬ならぬハなし。初我照文に使を課して重く京師へ遣せしハ、仁を迎へ執せん為也。然るを仁ハ使を俟で、おのづからにかへり来て且葛西にて軍功あり。又照文ハ風難に船を破られ漂泊して、阿漕に去歳を暮しつ。去の春更に京師に上りて我為にしも計り得て、大敵和平の時宜に造るハ是我素懐を果せる所以、其績抜萃なり。勧賞ハ異日にあらん。是を當坐の褒美にとて、急に傍を見かへりて、刀架に措れたる刀をまづ拿揚て、卒とて是を與へ玉へバ、照文ハ阿とばかりに。膝行頓首受戴きて。そハ過分なる御賜。鄙語云。衍心の功名ぞてそハ。冥加に餘る畏さよと、言未つ些退なく、却三家老と五犬士に君恩を謝しける。當下大岸法六郎も御目前に召出されて、先ゆハ照文に従ふて副使をよく志うとて、褒賞の詞を賜りける。甲乙面目身に餘るを清澄さこそと執合して。且りよせう。去歳の冬、照文を京師へ遣さる時、呈書を齎せるべし。吉凶料りかさ

けれバ、那地に到りてものせよとて、只素楮に御印章を做されて渡し給ひし。法六郎さへ附られしハ、後の便宜に做りけるを、神ならずして豫より知るよしもなかりきと云へバ、辰相然こそと応へて、咲くが如きを、阿漕にて那疑を解れたるも、御印章によりて。又京師にて、蜑崎が思ひの随に計り得て、御書を自由に寫せしも、御印章ある故なきバ、其妙さらにいふべからずと、譽きバ、信乃も親兵衛も共倶にうち點頭く。事皆人意の表に出ぬる。十一郎の揣る所、術よく事の整ひしハ、是我君の御盛徳と、伏姫神の冥助もあらん。左にも右にも蜑崎生の全功にてそあなれと、執合もきバ、荘介現八小文吾も感じて已ず。現に蜑崎の新智至にハ、必や犬阪も一階を譲るべしと稱して、笑局に入しかバ、照文ハ額に汗して、當りかへりと謝にける。當下義成ハ又照文に課せらるゝやう、汝ハ疲労もあるべけれど、従ふ瀧田へ罷り帰りて、京師首尾を老館に徳と告奉らバ、さぞ欽びのあるべけれ。我亦

思ふに那御使の来着までハ猶數日の暇あらん法六郎も宿所に退りて後の勤に就べき者に辰相清澄這意をうけて宜く他們を勸るべしと例の仁慈を示しぬれバ大家いよ〳〵感服して其日の席ハ果にけり是よりして稲村の城内にハ京師の御使を管待の準備遑なく旦し暮して十有餘日を歴ぬる程に有一日五十子の城より犬阪毛野ハ快舩の使に消息を齎して両家老五犬士等に報るやう這回參向の勅使代秋篠條生并に室町殿の御使熊谷生ハ両管領を御譴責の事果て近日渡海の聞えあり両三日に過べからず其御備をいそがせ給へ亂智案内を仕らん急急如律令とありしかバ義成是をうち聞て両家老辰相清澄及信乃親兵衛荘介現八小文吾等を召聚合て商議あり且課るやう那御使が立よる處ハ五十子ハ敵城なり又在る所の浮宝ハ皆是戰艦なるべし其汚穢る物を見て那人々を迎んハ不敬也其故に親兵衛と照文を洲崎の浦なる巨舫五六箇と士卒一百五六十名を將て那御使を迎ふべし又信乃荘介現八小文吾ハ這回の饗應使とせよ六郎兵庫助も其の意を得て旨を照文に傳ふべく又毛野が使にハ回翰を齎らせて其の意を得させべし事忽緒にすべからずと掟ていそがせ給ふにぞ大家都て承り果て次の日親兵衛と照文ハ準備の船を裝めて士卒なれバ早天より柴浦を投ていそぎける是よりの後幾日もあらぬ時に四月十五日京師の御使秋篠將曹廣當熊谷二郎左衛門尉直親ハ儲の船にうち乗て洲崎の浦に来着ぬ従ふ伴船五六艘犬江親兵衛蜑崎照文ハ別船にて先に進ミ犬阪毛野ハ後に従ふ這三士の従者も尠からず既に港口に造りしハ有司地方の小吏人们出迎へて前駈して稲村の城に案内なり儲の旅館に請待す饗應使犬塚信乃犬川荘介犬飼現八犬田小文吾助役政木大全も両御使に拜謁して欵待大賓の礼を以す毛野親兵衛照文ハ倶に

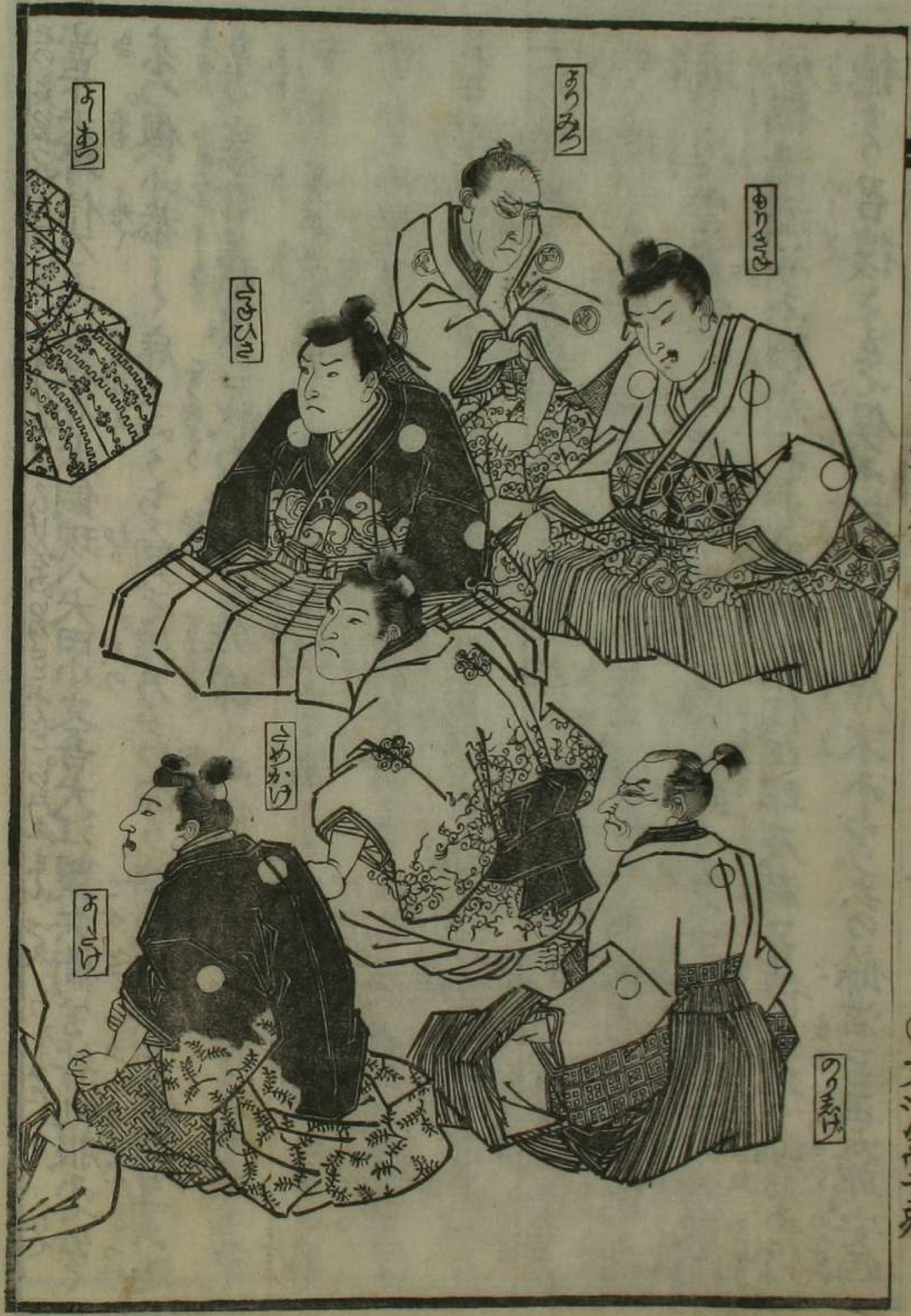
義成主の身邊に參りて裁稟す義あり。義成ハよく欽びて大敵既に兼服の聞えある兩御使来臨を忝くす。對面ハ必明日なるべし。然らんにハ今宵我久しく爰に留在らせる。滸我殿以下の敵將等に對面して愚意を示さずハあるべからず。先這一義を急ぐべしと詞委しく吩咐給へバ。毛野親兵衛照文等ハ敢異議なく謙して退りて辰相清澄と信乃莊介現八小文吾并に政木大全等に旨を傳へて共侶に事の准備をなさしける。恁而成氏。憲房。朝良。朝寧。自胤。爲景。義同。義武。憲重。胤久。盛實。及由充に至るまで預りの諸士一箇々々に沐浴させて新しき衣裳を薦めなどして成氏以下の囚徒ハ。這光景に胸安からず。原来今宵我們が首を刎ん爲にこそ。這款待を徹するなるめと思へども今さらに。人に問べき由なけれバ。倒に覚期を究めて。他等が隨意せざるハなし。恁而夕饌も果しかバ。又給侍の諸士ハ成氏以下十二箇の敗將を請ふて廣書院へ遷しけり。

當下犬塚信乃。犬川莊介。犬飼現八。犬田小文吾。犬江親兵衛等。皆礼服にて出て來つ。倶に恭しく。席上にうち向ひて信乃がいふやう。滸我殿以下の諸君子に造稟る。寡君義成の口状あり。久しく旅館の御徒然を慰めまゐらするよしもなく對面の義に及ざりしハ素より是故ある事にて。義成の本意にあらぬ事なり。やうやくに便宜をえらしまゝに。今宵見參に入らまく欲も先這義を造稟せとある。君命にこそはなれといひもあへず成氏以下の敗將ハ。生心して恥る色あり。その時席上に幾箇となく建列ねたる菊燈臺ハ。灯花の色を增て白晝の如く明けれバ照る金屏の後より。里見安房守義成主其子太郎義通と倶に立烏帽子長袴ゆゝしく。小刀を腰に跨て出て主坐に着給へバ。両家老辰相清澄。并に杉倉武者助。姥雪代四郎。及満呂復五郎。由郷向に行德より召復されて。倶に相從ふて席末にあり。その餘満呂再太郎安西



十二敗将（じふにはいせう）稲村（いなむら）の城（しろ）に幽（いう）せらる

のりふさ
なり氏
ともやす
よりたね
ともより



ありむら
ありふさ
よしあつ
さねひさ
ためかげ
おしげ
のりしげ

就介。磯崎増松ハ或ハ両主君の大刀を執り或ハ手燭を秉て扈従しつ後方に侍り。親兵衛と荘介ハ。這席の奏者にて主に向ひて諸敗将の姓名を通達す。義成是をうち听て找こて件の人々にうち向ひて名對面の礼正しく且いふやう。諸君いよ〱恙まさずや。義成不慮に罪を両管領家に得てしより料らずも水陸の闘戦に八犬士等が防禦の備ハ叉て勝に乗ざることなく竟に諸君子を屈請して當城に留め侍るハ是豈義成が情願ならんや。爭何せん両管領ハ敗軍の後跡を埋めて和睦の議なく其家臣等ハ守る所の城を棄て走りて其往方を知せず。諸君を迎まゐらまくする者一人も是あるを聞ねバ。只今日に至れる之然るを思ひかけもなく京師より両御使あり。一個ハ勅使代秋篠将曹廣當一個ハ室町殿より遣されたる熊谷三郎左衛門尉直親是也。今日しも敝藩に光臨せらるハまだ對面せざれども。聞くに和睦の一義ぞといへり。義成苟も居ながら

勅諚と台命を承らんハ武門の面目冥加に餘れる。歓び何者か是に優もべき。其の折をもて諸君子に。意衷を告まく欲する故に推て見参に入りゆひたと口誼に差する成氏憲房以下の敗将応難か阿とむかりに。言詳ならざれバ。大石憲重原胤久らそるく席末より。找こ出て答るやう。今にたどゆね御親命。我们主僕十二名倶に俘囚でありながら。坐して食ひ温に衣て朝夕の安かるハ君が博愛の餘恩にて仁者不殺の真心を感佩の外いひてたどと執合もさきバ。成氏憲房朝良朝寧自胤も倶に日屬の慈恩を謝して其寛仁を稱賛す。義成是をうちきゝて。滸我殿ハ我大父季基の時より舊交ありしにあらバ。又両管領の賢息達も倘係る湍に遇ざりせバ。いかにして敝藩に駕を枉らすよしあらんや。就て朝良朝寧主并に千葉殿に請まをしき一義ありといひて後方を見かへれバ。屏風の陰に扣たる。犬阪毛野と政木大全ハ倶に礼服晴やかに出て席上にうち向ひて仰き見つ頓首せり。登時

義成主ハ。先自胤に告るやう。千葉殿。這壯佼を認りあへりや。是ぞ此蔽藩の軍師犬阪毛野金碗胤智是也。其素生を原るに貴藩の忠臣と聞えたる粟飯原首が遺腹の子也。餘事ハ他が口中にあらん。胤智我とく見參せずやといひもあへず毛野ハ阿と応て恭しく自胤にうち向ひて告るやう。言新しくいへども臣なるが父粟飯原首ハ原是千葉の親族にて君に仕へて私なく。常に諫を呈りて安危を未然に計るものから。佞臣馬加常武に讒て許せられて剿に籠山縁連に擊れしを常武猶も讒言して臣なるが嫡母と兒女兄さへに慘刻誅戮せられたり。臣なるが母ハ父の妾にて那身に遺腹ありけれバ難を免れ辛くして相摸の國足柄の山脚なる犬阪村に潜て居り臣なるが成長に及びて。父の枉死と寃家の上を言詳に説示して幾程もなく身故りにき。是よりの後一日も臣なるハ復讐の志移らず。假に女子に身を做して。俳妓旦開野と喚れつゝ。竟に馬加常武が酒宴の席に

招きたる當晩寃家常武と一家の主僕を鏖にして垣を乗て出る程に。這時まで宿世ある義兄弟と又知ざりし犬田小文吾悌順が常武に禁錮られて別室に在りしを救助にして城を出船に乗りて別れて他郷に走りぬ。又那寃家籠山逸東太縁連ハ今後扇谷殿に仕へて五十子の城に在り。去歳の正月の下浣相摸へ使を奉りて那地へ啓行を怠えしかバ鈴の茂林邊に埋伏して其首捕て親弟兄の怨を雪めにき。然のみに就く偽聞の錯誤もゆゑありて扇谷の両公達も倶に聞え召れつし。臣なるが後の復讐ハ便是御家の忠臣河鯉權佐守如の汲引に由れり。守如ハ那縁連が奸佞君を惑へまつるを憎みて除まく欲する程に。他ハ臣なるが寃家なるを知りて其起行を報るのミ。當日犬山道節が復讐の為ならんとハ夢にだも是を知ず。臣なるも亦其折まで道節と相知ざる事おのづから合期して扇谷殿の道節に逐れ給ひしのミなるを。五十子の城へも犬塚信乃に援れしかバ。縁連の黨人ハ。守如謀数ありと譖て。いよ〳〵君を惑せしかバ。

憐むべし。守如と鮮首前さへ身を措難く。倶に刃に伏ぬひとし世の風聲に称えらる。臣等は是過世ある八個の義兄弟ゆゑ後に悟りて共侶に近曾當家に仕へしより。皆用ひらるゝ日浅からず既に微功を成といへども。臣等は水軍の隊の長にて。君が御隊に向ざりしは是切もの幸ひにて惑を解せ給ひて佞臣常武縁連が奸詐殘忍の酷しかりけると首が忠誠鯁義に枉死の左と右とを分ちひて死後に賞罰の御沙汰あらば。善政枯骨に及といへん。這義を訟まうさん為に憶も多辯に做りけれ。と報る誠は感激の目皮の露に知られけり。當下大角小文吾も膝を拱めつ額衝ける頭を擡げて。自胤にうち向ひて且いふやう。最前浅草野邊に去て料らず見參に入りし後の事を又禀解ぬれば。かの折君に知られまつりて然も恩遇るゝにあらねど。逆臣馬加大記常武が拉て私宅に抑留めて。悄地に他が逆謀の帮助にせまく欲せしを。某緊しく說破りて。其非を擧て箴めしかバ。常武陽には從へども。是より言の洩れもやせんと怕まく駭て某を別室に閉籠て久しくなるまで放ち遣らず。折から常武が賀席にて肇て對面せる僞妓旦開野は假に女なるを知らず。他が復讐の後にて遂に奇る過世ある義兄弟なるべきを悟れども。言猶盡すに遑なく。但其帮助に儘せて他郷に走りゐれ遁莫君が御内の常武が餘黨多かるハ。猶胤智と某を誣て云々といひもやらん。今又見參の折をもて胤智と共侶に舊冤を解まく欲す。這義を思ひ召されずやと言爽に辯ずれバ。自胤は聞く事毎に恥て身を措所を知らず。赧然として答るやう。犬阪といひ犬田と云我に因縁のありけるを。我愚にして用ることを知らず。又今日まで常武なるが奸詐逆謀を悟るに由なく。剰這回両管領の催促に從ひて。俱に敗軍の辱に遇けるを只後悔の外あらず。尚幸に和議成て城地に還ることを得ぬ。使札の往来を饒されなバ。教を承まく願ふのみ。と謝するを義成うち咲て。千葉殿恁思ひ給へバ。只胤智悌順の歡びのみならず。

我も亦ねがひありて本意に稱ふて最芽出たし。就て又扇谷の両公子に。請まく欲する一義あり。御家の忠臣河鯉守如が獨子なりと唱ふる河鯉佐太郎孝嗣を。嚮に姓名を政木大全と改めて。今這席末に在り。他は刑餘の人なれども其罪にあらずと唱ね。いかで御目を賜りね。と引合されバ孝嗣ハ我を出て朝良と朝寧にうち向ひ額を衝きて。姑且く稟もすべう身の非を飾るに似たれども臣が両家に在りし日は只忠孝の二をもて仕へまつるの外ならざりしに讒者の為に誣られて竟に死刑におこなはれ。白刃頭に落む折靈狐の冥助によりて不測に必死を免かれて且犬江親兵衛に邂逅の歡びあり。それより後は箇様々々如此々々の事ありて親兵衛に從ひて素藤對治の首より。這回又親兵衛の恩義の為に葛飾の闘戰に義通君の先途を援て強敵長尾景春を防ぎたるまでの尾まで其崖略を陳ていふやう。是此旨の恩義に報ひのミ。身の薄命を見かへれバ。栄利を求むるに意なきを。數回に犬士等の

薦めによりて里見殿に知られまつりて。竟に亦脱るゝ路なく。昨今仕へて一隊の長の後にこそゆるされ。然とても。今この時なくハいかにして両公達に見参を饒されんや。稟もす義を悟らせ給ひて。御歸城の後老館定正に御上らるゝならバ臣等が寃屈の罪解けん。只身の幸のミならず亡父も冥土黄泉にありて。さぞな歡びはべらめ。這義を願奉ると請へバ亦親兵衛も我を出て朝良と朝寧にうち向ひて。鳥滸がましく候へども我們二名が稟もす義あるを咎め給ひね。孝嗣が死刑の折箙大刀自に形を變じて根角谷中二が掌票に。なくて旨く那死を救ひし白狐は。孝嗣の母に受たる恩を報ん為の所行なるよしも後に備に知られたり。其頭某は故ありて武藏に旅宿せぬる程に豫て知る孝嗣が寃屈の死刑の痛ましさに。いかで末期を見まくほしくて忍岡邊に赴きつゝ他が必死を免し時。料りて其強弱勇怯を試して友垣を締びたれ。然を根角谷中二們ハ淺慮なる聽斷もて。孝嗣を救ひしハ。親兵衛が幻術の致所と唱へ上ていよ〳〵　君我

惑志し。と人の噂に聞えたり。夫幻術は魔法なり。仁人賢者の做もなるらんや。某は姫神傳授の神藥をもて人の必死を起しまゐらせたり。昔日朝寧主も死なで甦生りけれバ。我神藥の奇功なれども。那俟人們は亦誣て幻術なりといひもやせん。左の義ハよく悟らせなバ孝嗣が忠と不忠の御疑ひは解けるべし。讒者の舌ハ劍に似たり。市に三虎を做もと叱ハ。曾子の母をも欺くべし。怕るべきにはいぶかや。と憚る色なく解醒せバ朝良朝寧ハ甚く悟りて倶に呆るゝを半晌許。姑且して朝良のいはく。家兄をいふに听なひけん。孝嗣の言誠に以あり。犬江が議論ハいよ〳〵妙に。唱ふ饒されて歸城せバ必親に報ん。とらんバ朝寧も倶にいふやう。最に孝嗣が罪過の事ハ。親の讒斷ありければ我知る所ならねども。當時虚実を正しもあせで殺さバ必後の世までも不明の譏を貽さん。而靈獄の冥助あて今賢君に仕るは則自他の幸ひ相応して。と応をきれバ義成主ハ謝して且哭きげに。左の義も亦易かり。却三浦殿親子の如きハ坂東一の勇士なるに犬村大角礼儀が。僅に三百の小兵をもて克よく城を受合て。主を當所に從ましハ。成敗時運に由れるのみ。剰又必肋力をもて理義を破らむ。其進退を敵に儘く。多く士卒を害ざりしハ。是大勇の致所。識者ハ必感歎まべし。且和殿親子ハ我當前の敵ならねバ疾にも送り還まべきを。いまだ其義に聲ざりしハ。我這意を知らしめて後の好を修んとてこそ。今一霎時の程なるべし。と慰められて義同ハ蹴然として答るやう。示教の赴薫りぬが。かくいへバとて誇るにあらねど。我力山をも抜くべし。只仁と義にハ敵しがたう。我倘なぬ置れぬハ。和君并に犬士等の大仁大義を具に知らんや。孩児が為にも後學みて歎バなくてはなれ。と謝すれバ義武頭を抬げて。間常ハ迂遠なりと思ひし仁義の微妙を知りぬ。譬バ雲と水の如し。斫れども斫まで拂へども去らず。然るを武農負まじハ愚なりき。と呟くを義成急に推禁めて。御父子の讒遡當りがたう。是よりの後交を結バまじるハ幸ならん。といひて倘を見かへりて稍戸貝徒然ならん

和老は荘介小文吾と舊交ありて。且這回行徳口の闘戦に他們が報恩の為なるも我も粗々知りぬ。然れど猛く勇のあまり。深川に和老を赶稠る。満呂復五郎も共に在り。弁を悄地に船をもて朝良主と共侶に。迎拿りしは要あるゆゑにて陣没させじと思へばこそ。其作者は共に在り。といひつゝ毛野を指示せば由充は阿と応へも果ず左見右見て。現に賢君の下より八行の臣まであかり。由充が不肖なる我身一個の敗軍ならねど。當日死ざるを怨とも。非如報恩の義を以首を接るともあらとも。今さら何を面目にして越路に退りゆかんやと言蕭然に答るを毛野はさこそと慰めて。其慷慨は理りなれども。かの折和殿の拯ふる。朝良主は篠殿の外孫にて世の伯を承。當那君陣没あらば。和殿も必命を殞さん。這故に我們智先見あり。計りて當城へ迎へ拿りしは。虜に做まくせし為にあらず。是則荘介小文吾に代れる二度の報恩のことゝいへば。荘介小文吾も慰めて倶にかくいふ。稲戸主和殿節を折て自然に儘せて。身を敵城に置といへども忠義に厩る所なし。其賢良の故をもて我君格別の管待あり。是亦臣們が願ふ所。徐に帰北の折を俟て後の好を修めよと。諭せば由充頷くのみ。又のことばもなかりけり。當下義成主は憲房にうち向ひて。山内の公子。那騈馬三連車は奇妙なり。然れども奇功ある荒は奇物是を破ることあり。和君の後れなるにあらば。魯般が雲梯も墨翟に折かれならさのみ。思ひ屈しなひそと慰められて。憲房は憮然として嗟嘆に堪ず。弁々いそなるなり。拙巧何ぞ負むに足らん。盛實先生拘られて後に。拗敗軍に做りしより。身も亦擒にせられて。いまだ親の安危を知らず。恁而在る事一月も千秋に異ならず。這意を察しなひねと謝ませば。義成感歎して孝なる哉。若たる人未憑しくかと譽れば成氏側より。然也々と點頭て。這子の如きは親に従ふ行に似て行にあらず。咱們は初國府臺にて信乃現八にいはれし義あり。過ちて改ざりける。過ち然

争可はせん悔さ及ばぬ事ながら、在村を恨しけれど陪話るを義成推禁めて。君は貴人にして且舊好あり。那御征なかりせば駕を藪潘へ枉られんや。憂苦を轉じて歓びと做しなんも遠からじと慰むる詞も果ぬ折から、土圭轔りて初更になりけり。憲重是をうち咲て胤久盛實等に目を注しつ我も出つ義成主に今宵の對面を謝していふやう有がたきまで御懇命。孰か感悦せざるべき。既に初夜にとゆべ華昏の暇を賜るべくやと執合ければ、為景は獨傲然とうち笑て現に敗軍の將には兵を談すべからず。俘囚の人には安樂を示すべからず。我言るはそれ故。不礼にはあらず退りなんと誇るを成氏睨へ禁めて。憲房朝良自胤等と倶に謝義の詞を連ねて。主人の退坐を乞しかば。義成ゆゑて敢て強ず。現に今宵は初對面なり。長談燭を續べきにあらず。復こそ見参すべけれとて義通と共侶に辭別して退きのくば辰相清澄以下の衆臣各主に從ふてうち連立て退散を。登時預人等多く出て来て成氏以下の十二敗將に。請ふて臥房へ案内をなす程に信乃現八は成氏を送りて枕に就せ。毛野は自胤を送り。政木大全は朝良朝寧を送り。莊介小文吾は稲戸由充を送りけり。各所縁あればなり。その他齋藤盛實は憲房の伴に立ち為景憲重胤久は親兵衛と預人に送られて各臥房に入りにける。

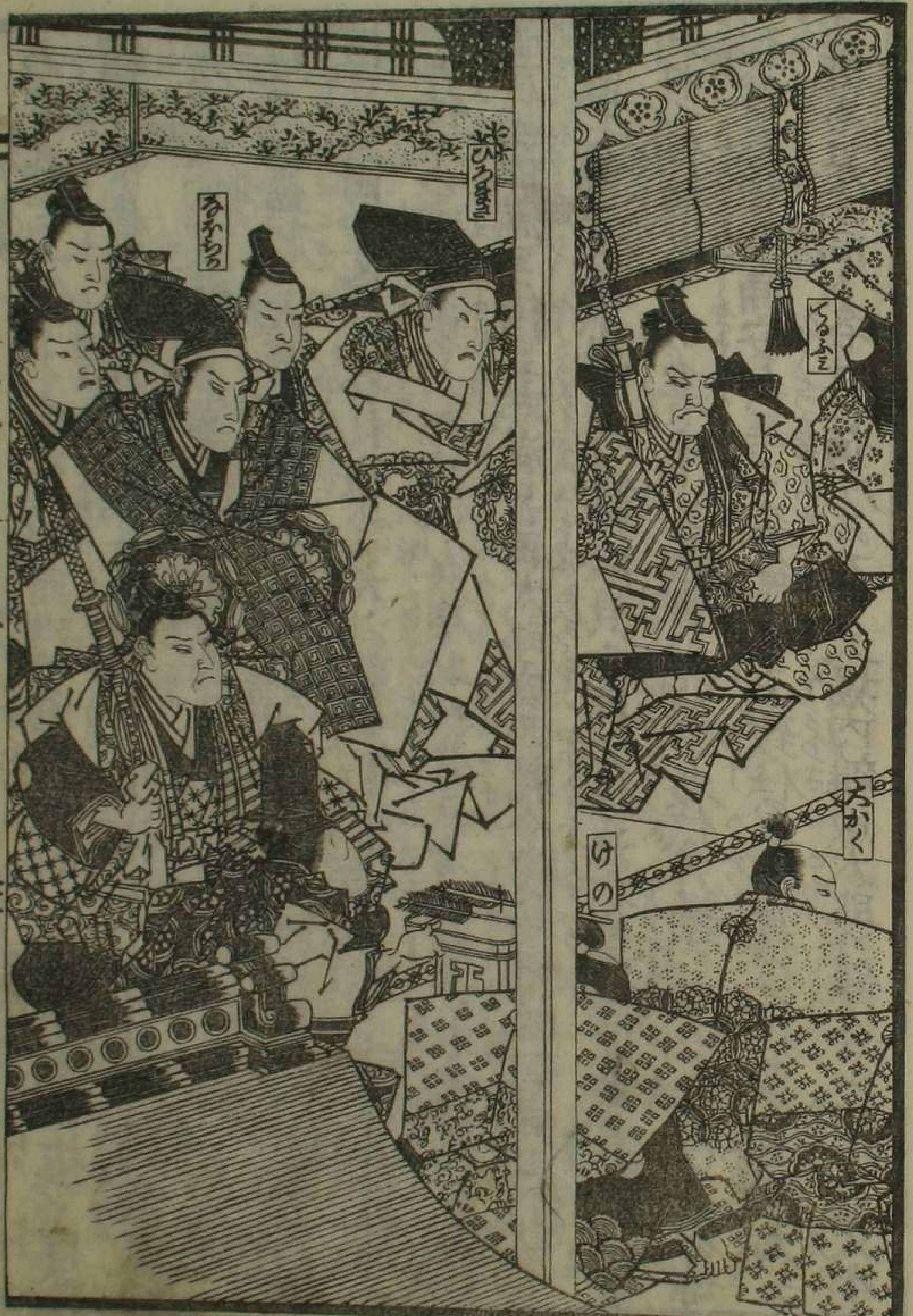
第百七十九回中

（長編なほ續を且て遠回を釐て上中下と題目は上に見へたる如し且四十六の巻端に追て附録目次出しぬれば看官此彼照し見るべし）

却説義成親子は其夜分成氏以下十二個の敗將に對面の次の日に。京師の兩御使に拜謁して勅詔并に室町殿の台命を承るべしとて。その朝勅使代秋篠將曹廣當と副使熊谷二郎左衛門尉直親を。稲村の城内なる正廳へ請待を。その故に犬山道節忠與と犬村大角礼儀は召れて昨日新井忍岡の兩城より。各快船にうち乗りて昨宵雙闌て稲村に参上を。

伴當僮に三十名に過ず。又那両城ハ田税戸賀九郎逸時苫屋八郎景能印東小六明相荒川太郎一郎清英等。衆兵をもて是を守れり。尓程に道節ハ。去歳の冬の水戰に。射られて海底に墜されける。流れて下總葛飾なる。矢斫河に造りし時犬飼現八に拯れて且親兵衛が神藥の即効ゆゑ甦生りつ矢傷愈て生拘見等と共侶に稲村の城に在りと聞知りて怒罵ること大方ならず。且いふやう。館ハ慈善を旨とせらるゝ御軍令ありとても。射て墜しつる敵の大将を救ふて活し置るゝハ戰ざるにまくるなり。好々那奴が稲村に在る程ハ。非如栽番召さるゝとも。我ハゆるしかたくと。敦圖猛く發憤しつ。明相に諫められて。本城に來にけれど。尚憤り解けざれバ。其詰朝先信乃に。件の怨をいひ出して。云云と論ぜしを。信乃も徐に和解ていふやう。犬山升も无理之那扇谷ハ。和殿の故主の寃家なりとも。去歳の春那頭鎧を射て墜

して志を果したるにあらずや。然ど去歳の冬の闘戰ハ。當館の御大事也。我私の志を行ふべき時にあらず。犬飼犬江ハ。這義をもて倶に那死を救しのミ。敢敵を愛するにあらねど。朝寧が折命終らバ。後に和睦ありとても。猶怨を遂さるべし。然でハ後の患ひ之。其の義を忘れ給ひし歟と解れて道節言下に悟りて寔に尓也尓也と応て又身辨せず。是よりの後現八親兵衛と團坐する日の多かれども。這義を毫もいひ出ず。倘同人のある時ハ。开を來も他事に紛らして說諍ることなかりしかバ。信乃ハ悄地に感歎しつ。哥々ハ理非に醒て惑ハず。君子の風ありとぞいひける。閒話休題。時に四月十六日。當早犬江親兵衛蜑崎照文等。光絹衣麻上下にて。京家の旅館に伺候して。時分宜きよしを報しかバ。勅使代廣當詮使直親ハ。立烏帽子大紋の直垂にて。小刀を腰に跨て出て案内に就きしかバ。隨從の雜掌十余名素袍烏帽子にて大刀を執り。征箭を執れるも


ひろまさ
なをちう
てるふミ
大かく
けの

老侯

あり。各主に倶してゆくめり。恁而件の両御使は。引れて儲の席に近づく程に。國守安房守義成主は。嫡子義通と共侶に朝服に身を整て三四間出て是を迎へて。正廳の上坐に請待を。隨從の雜掌は。廳の外廂に羅列らる。當下這席に與れる。犬阪毛野。犬塚信乃。犬山道節。犬村大角。犬川荘介。犬飼現八。犬田小文吾は。各礼服にて。犬江親兵衛。蜑崎十一郎と倶に。亦是外廂に在て。這他次の間には。東六郎。荒川兵庫助。杉倉武者助。政木大全。田税力助。姥雪代四郎。満呂復五郎。満呂再太郎。安西就介。磯崎増松。朝夷三所。白濱十郎。七浦二郎。東峰萌三。鞍船貝六郎。太岸法六郎に至る迄。皆礼服の袖を列ねて伺候せずといふ者なし。又義實老侯の名代に。堀内藏人ぞ侍りける。其餘杉倉木曾介。浦安兵馬。小森衛門等は。致仕の老人なれば召れず。又天津九三四郎も是に同じ。各其宿所に在り。又堀内雑魚太郎は。鎌倉に在陣す。又小森但一郎。浦安牟助。千代丸圖書助。木曾三介。小水門目。音音。妙真。曳手。單節。後岡猿八。鮠内葉四郎なるは。五十子及大塚の城に在り。印東小六。荒川太郎一郎は。前に見へたり。又登桐山八郎なるも。石濱の城に在り。落鮎餘之七なるは。穂北に在り。又真間井秋二郎。継橋綿四郎。洄鷺手古内。振照弘教。三四的寄舎五郎。須々利園五郎なるは。國府臺の城に在り。鳥山真人なるは。岡山の壘に在り。石亀次團太。越鄉三は。行徳に在り。又楯持儀杖。大樟村主は。既に身の暇をたまはりて。其本領に在り。又直塚紀二六。犬江屋依助も。有功の者なれども。他なるは蜑崎が家僕と。市河の町人なれば。共に數ふべくもあらず。向水五十三太。枝獨鈷素手吉なるも。是に同じ。看官是を思ひねか。却説熊谷直親は。義成にうち向ひて。房州将軍家の御諚ありと。いへば義成阿と応て。膝を找めて拜聽す。直親大紋の袖掻合せて。抑舊冬兵乱の日。其基本を原ぬるに。扇谷定正が。聊なる怨によりて。山内顕定と。近國雷同の兵を連ねて

安房上總を伐まくも其闘戰破れしより。東國ハまだ静ならねバ。這義既に京師に聞えて。上の御心安からぬに因て詮議を遂らるゝ所。定正顕定の非理分明なるの故に我直親を御使に做されて御譴責あり。直親則上野沼田白井及河鯉の城に發向して上意を傳へて其罪を責るに定正顕定長尾為景に至るまで各其非を後悔して禀し解くに詞なく。罪過を宥免あらるゝならバ里見義成と和睦して東國太平の功を奏も為べし。但定正顕定の児子及合戰の諸將の敵に生擒られて今猶稲村の城に在る者主從十二人あるべし。義成速に和議を容れて其敗將等を返しなバ。両國是より好を結びて脣歯の思ひを做まくべきのみ。這義に叛きなバ。天誅國罰両なから身に受て子孫断絶せん言偽りなき昭据にとて則連署誓言文に血を濺ぎ各征箭を折添てまゐらせより人過ちて改るに憚りなし。両管領ハかくの如くなる上ハ荷擔の諸將孰か違ん。房州ハ忠義孝順の人也。其義ハ室町殿も知しめしたれバ速に

ホのろく

御兼ありて。捕所の敵城を返さて。虜になる敗將等を速に放還さバ公私の幸甚しからん。這義は諚意のこゝろバ最も畏れ天朝も叡慮安からざる所あり且房州再三貢献の忠誠と。其家臣八犬と唱ふる者の。戰功を叡聞ありて連りに御感のあまり。勅使代秋篠主を添られたり。無異の御兼あるべしと詔れて義成喜悦に堪ず。謹答るより。御諚兼りけれバ。曩には義成水陸三路の大敵に當るといへども只防ぐを旨として殺伐を好とせざりしに諸隊の壮佼八犬士等が北るを逐ふ敵の棄たる城に拠りしも是あり。或ハ又殺さで生擒けるは。敵將も多かる只其暴を懲さん為のみ。久しく留むべきにはあらざりしを。いかにせん大敵遠く跡を埋めて和を講ずる者なかりしかバ今に至りけるね。然るを天威御武徳の過分なる恩命を辱くも何をか違背仕らん。速に那城を返し。敗將を送り遣んが臣が情願にはべれども。いまだ両管領より和睦の使者なし。其義ハ誰何と請問べき外廂に

賢侯

賢侯　故

羅列れたる。京家の雜掌両三個遽しく膝を找めつゝ恭しく義成にうち向ひて。賢侯其義にはあらで候。臣等は京家の人ならず。実は扇谷山内滸我三將の老黨なる。巨田新六郎助友。齋藤左兵衛佐高實。下河邊荘司行包なるぞかし。又只我們のみならず千葉の老黨原胤久の弟なる。原赤石介胤輔。長尾の老黨直江荘司。三浦の兵頭。水崎蠻人等も。這里に縮り。寡君定正顕定兩將軍家の御譴責に畏こて和睦の御㬹を仕るといへども。いまだ賢侯の同意なるべき歟。否を知らざるの故に。京家の御使に請まつりて我們其伴當に打扮て。倶に推參仕りぬ。事機変に似て機変にあらず。いかで海容を願まつると。異口同様に陳謝して携へ來る素朴の三方扎に。定正顕定の折て和睦の誓に表する白羽の征箭二條載たるを助友高實倶に捧揚て義成主に晋呈ば。當下下河邊原直江水崎の四老黨も倶に義成にうち向ひて。額を衝て拜謝しつ。和親の使者の

深痍に　本

礼を盡せば。熊谷直親執合て。房州疎畧をなす外日の咎ぞ両管領諸敵將は。皆和議をいそぐの故に。我其使をゐて來れりと陪話れば。義成異議もなく。其義ならば。いひぬと応く傍を見かへりて件の使者に答るやう。憶ざりける亟の通交義成も又欲び思へり。和睦の事は別議なし。餘事は後刻談ずべし。倶に客の間に退きて候を便宜あるべけれど。亟の応に助友等は相欲びて言葉もなく。却八犬士にうち向ひて名對面して且いはゞ皇裏には両敵厮殺時或は黄昏或は乱軍の中にして面を認られざりしなるべし。开が中に水崎蠻人の如きは。折犬村主に戰ひ負て小磯真砂と共侶に深痍を受て身を免かれて。其後河鯉の城に來て在りしかバ。今番の使に立られたり。只這漢のみならず。小磯真砂又許我の近臣望見二郎。昂華七郎。又稲戸津衛の從軍なる妻有復六荻野井三郎も。其折本所の戰場を免れたれども敢越の片貝へ還らず。津衛の安否を知まくほりして河鯉の城に來て今も猶淹留て津衛の迎に來つべき者也。昨も呉兵

越の怨敵より。今ハ虞芮の良隣に做るハ。仁義の餘徳なるべし。いかで教を願ハのこと諫まれバ。毛野ハ信乃ハ親兵衛ハ大角ハ荘介ハ現八ハ小文吾ハ。和談の成りしを祝着を弁が中に道節のミ聞ざる如く黙然たり。當下義成ハ嗚して。誰ぞ在る這六個の使人を客の間に案内をせよと喚立られて。阿と答る田税逸友蜑崎重時ハ次の間より身を起して來て。助友以下の使臣に案内をなして以て退けバ。迎へ眞の雑掌の五六名を送りける。介程に秋篠将曹廣當ハ信吉と共に義成にうち向ひて。房州升進の宣下ありと告れバ。義成答も果ず義通と共侶に席を避て拝聽を。廣當威儀を繕ひて。宣下の趣別義にあらず。天皇詔してのたまハく。里見安房守兼上總介源の朝臣ハ。礼を好みて富とも驕らず。善政仁義にあらざる者なし。國治りて民親み。賢佐多しと聞えたり。是を以迎に貢献の使者をまゐらせて。其忠誠を致すこと再度に及べり。剰又去歳の冬ハ三路の大敵を能く防ぎて。

一歩も境に入らずして。一時に強敵を撃退けて。國民塗炭を免れたり。是併其家臣犬士と喚做る者の。智計武勇の羽翼に由れる。其功豈鮮少ならんや。夫大功ある者ハ必重賞を行ふべし。賞罰正からざるときハ。賢路窒れ小人時を得て民従ハず。その故に義成朝臣を正四位上左少将とす。安房守兼上總介故の如し。嫡子太郎義通を従五位下右衛門佐とす。其父義實朝臣ハ隠遁既に久しといへども。創業の武功虚しからず。麟児鳳孫。克く箕裘を嗣ぐに足れり。よりて宜治部卿とし。又其家臣犬江親兵衛てふ者ハ。去年京師に使せし時。輙く虎狼を對治して。良賤安堵の思ひを做せり。その故に勅使代秋篠廣當を由て中途に他を追なめて。爵位の宣下あるのみ。他亦禀を由ありて辭ひて禀まつらざりき。故に今度改て並べて。其八犬士を従六位の下に叙すべし。且犬江親兵衛仁を兵衛尉に。犬阪毛野胤智を下野介に。犬塚信乃戍孝を信濃守に

犬山道節忠與を。帯刀先生ニ。犬村大角礼儀を。大学頭ニ。犬川荘介義任を長狭介ニ。犬飼現八信道を。兵衛權佐ニ。犬田小文吾悌順を。豊後介ニ做さる。倶ニ忠戦大功の朝賞こ。這義ハ義成朝臣。稟まつりて。件の八人ニ配當まへし。と天皇が。詔して宣へり。是ニ由りて上卿及大使右少辨奉り。臨時の除目を行れて。勅使代臣廣當を遥ニ安房へ遣されて。朝恩を知しめらる。這御旨を室町殿ニ御合さす所に。熊谷生の齎しる。御教書もあるなるべし。備ニ告げ詳ニ示して。准備の廣益ニ冠烏帽子朝服を叙領ら載るを。數通の位記と倶ニ逓與せば。又熊谷直親も。室町殿の御教書を合ま出て義成主ニ渡しけり。這時義實老侯の名代たる。堀内藏人貞行ハ。両家老等と倶ニ次の間ニ在りしが召れて當席ニ入りて拝聴す。然ハ外廂ニ侍りける。八犬士等も。朝賞の過分ニ驚歎。皆平伏る儘ニして頭を抬るなかりけり。當下義成主ハ謹で勅答きらく。臣義成纎芥の微功をもて。父祖二代家臣某等八人と倶ニ重爵の勅賞を稟るよ。今古ニ例あるべくもあらず。且父義實の如きハ。捨て栄利ニ心なし。老病那身ニ副るの故ニ名代をもて拝走す。是ぞニ不敬ニハニ何ぞ散位を辱ら仕るべき。況犬江親兵衛等八人の受領も勿体なし。義成僅ニ房總二个國の守ニして。受領の家臣八人あらバ非如勅賞なりとても。僭上ニ似て罪免るべからず。物盈る時ハ必虧く。亭午の目輪。三五の明月。孰ら傾き虧ざるべき。義成ハ其盈るを願ハず。盈ず虧ずしくあるべきのミ。いかで辞表を献らまく欲す。御執成こそ願しけれと。辞ふを廣當等あまぞ其謙遜ハ然るよなるが。王事盬なし。綸言ハ汗の如し。出て二たび返すべからず。只稟まつるニあるをもあらド。と諭せバ直親も倶ニいふやう。昔鎌倉の右大臣（實朝）居ながら大任を稟まつりしより。其身ハ在國して受領ましぬるも尠からず。然をいかんや戦國割据の今の世ハ上洛最容易からず。何ぞ居ながら受まつるを僭

稱

上とのこゝろえせんや。この義ハ室町殿の執奏によりて定められたる恩賞なるに开を強て辞ひ稟さバ違勅の罪を争何ハせん。御承勿論なるべしと觧れて義成脱を路るゝ。沈吟ずる頭を擡て八個の犬士を見かへりて汝等も兼りつる我當惑を査すなりし。といはれて犬士等ハ阿とばかりに応て毛野に目を注れバ毛野ハ夙く心得て。則答稟す。我君御父子の御栄爵ハ臣等が願ふ所也。然ども思ひがけもなき臣等が受領ハ胸安からず。縦些の階級ありとても君臣ともに受領の名あらバ是上を乱るゝ。這義ばかりハ幾番も只御辞表を願ふのみと云ぞ。親兵衛信乃道節大角荘介現八も。又小文吾も共侶に同意のよしをいひまうすを義成急に推禁めてよつぎて論議ハ不敬也。先承りて後にこそと諭しつゝ又廣當直親に勅答異義もなかりしかバ廣當直親相歓びていはひあへりとぞ稱ける。然バ次の间に這問答をうち聞く両家老諸士の毎憶ども歓びの聲を合せて千歳を唱ざる者なかりけり。

話

勅答既に果しかバ。饗應使犬江親兵衛。蜑崎照文等両御使に案内して別廳にて盃酒の礼あり。犬塚信濃犬阪下野犬村大学犬川長狹荘介犬田豊後犬山帯刀犬飼現八兵衛等。両御使に拝見して。受領の歓びを稟しゝめかし。是より後も謙遜して。守介尉頭ハ各省て敢唱ず。就中忠與義任ハ後々までも猶只道節荘介とのみ喚せて官名を稱まうさゞりし。況六位なるをハ秘して人に知せねバ世にハ傳えざるなりけり。さて是後の話之傳而両家老諸兵頭も。両御使に拝謁して。配饌の欸待淺からず。給侍の青士入り替り山海の美味を盡せり。盛饌ハいふべくもあらず最後に義通父に代りて廣當直親に酒盃を薦めて大刀馬代各白銀二百枚を牽れたり。然バ京家の雑掌伴當奴隷に至るまで咸珍饌に飽ざるハなし。且折乾さへ賜りていよゝ酔を盡しけり。既にして日ハ傾て又當席も果しかバ両御使廣當直親ハ辞て照文等に送られて倶に旅館へ

退りけり。その日巨田助友。齋藤高實。下河邊行包。原胤輔。直江。水崎等は。客の間にて饗饌の儲にあたり。犬阪下野。犬塚信濃。犬村大学。犬川長狹等は。送代に出て來て。酒盃を薦むれども。助友等は辭ひて多く喫まず。只城返與の日を定められて退りて。準備せまくほしとのみいひけり。既にして酒盃納りて。又犬塚犬阪は。共侶に出て件の六個の使人に君命を傳るやう。和議既に成る上は。那五个城を返しく敗將達を送り遣らんが。今さらに仔細なし。那君達に面談して。時日を定むべしとありしかば。助友高實行包等。相歡びて商量するに。今より六日の後。本月二十一日は吉日なれば。その日なるべしとて。這義を以答しかば。二犬士則義成主に聞え上さく。件の六個の使人を引て。成氏以下の諸敗將に。對面を饒しける。這段は尚長やうにて。亟に盡すべくもあらざれば。又卷を更めて且本回の局末に。解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十八　終